



# 「水がめ運びを体験して」 学校新聞の作成を通して 世界の子供たちの現状を伝えたい

報告者 埼玉県私立星野高等学校 新聞部顧問 中川 菜弓先生

## 1. 活動のポイント

2008年6月、埼玉県私立星野高校の新聞部員たちは、学校新聞の特集テーマを考えていました。その中で「私たちは今、幸せに暮らしているけれど、世界には恵まれない子どもたちがたくさんいる、そのことを私たちはよく知らないし、知りたいし、知らせたい」という二年生の部員たちがいました。新聞をつくる以前に、「どうなっているのか、とにかく知りたい」と考えた部員たちは、関連の資料をユニセフから送っていただき、またそれ以外の資料や情報を集め、勉強を始めました。

世界の子どもたちが抱える多くの問題の中から、部員たちは「水」に焦点をあて記事を書くことに決めました。ユニセフの冊子にあった大きな水がめを運ぶ子どもたちの写真に、部員たちは心を動かされたようです。日本ではあたりまえのように使える水が、実はとても貴重なもので、泥水を飲んでいたり「水がめ運び」をしている小さな子どもたちがアジアやアフリカにはたくさんいて、学校にも行けないということ、そしてそのことを自分たちが知らなかったということが、記事を書きたいという原動力になっていきました。

## 2. 実践

### (1) 調べたことを知らせるだけでは、「新聞」じゃない。

自分たちが感じた衝撃を、新聞を読む同じ高校生の読者にどう伝えようか、部員たちは考えました。遠い国の遠い話ではあるけれど、それを自分たちの身近なこととして感じてもらいたい、知識としてではなく実感としてわかってもらいたい---そのために彼らは、「実際に自分たちがその水がめを運んでみる」そして、その体験を記事にすることにしました。

### (2) 水がめを運ぶ

ユニセフから水がめをお借りし、暑い夏の午後、水を一杯に入れた水がめを運びました。

<星高新聞151号2面の記事から>

#### 水くみは子どもの仕事 —15kgの水がめを運んでみました—

アフガニスタンでもジンバブエでもマリでもネパールでも、水汲みは女性と子どもの仕事だ。毎日数時間をかけて、数キロメートル離れた井戸まで水を汲みにいく。私たち新聞部は、ユニセフにお願いして、実際にネパールで使われている水がめをお借りし、第一校舎から、1.3kmほど離れた第二校舎まで運んでみることにした。水の入った水がめの重さは15kg。暑い夏の午後だった。

**持ち上がらない!** 水がめに水を入れて持とうとした時、水がめがとても重く感じ、スッと持ち上げることができず、持ち上げて腰や背中、腕が痛くなった。第一校舎から第二校舎までの道のりは平坦だが、途中歩道橋を渡らなければならない。ちょっと恐ろしい…。

**下り坂はこわい** 歩道橋の階段を上るときは足元が見えるので安全に上がることができたが、反対に下りるときは水がめが視界をさえぎって足元が見えず、下りるのに片足ずつゆっくりと下りなければならなかった。重い水がめごと下に落ちそうでとてもこわい。



水がめは予想以上に重かった



水がめ一杯分は500mlペットボトル二十四本分

**暑い…しびれる…** 日が照りつける中、私たちは3人交代で水がめを持って歩いたのだが、中の水が振動ではねたり、だんだん腕がしびれ始めてきた。14：55に第一校舎を出発し、第二校舎に到着したのが15：18だった。普段は歩いて13分の道のりだが、今回は3人がかりで23分かかった。

**水汲みは子どもの仕事** ネパールの女性や子供たちは、13リットルの水が入ったこの水がめを何時間もかけて村まで運ぶと聞いた。そしてそれを毎日繰り返している。私たちは靴を履き、舗装された道路を歩いて水がめを運んだが、ネパールの子どもは舗装された道を歩いてはいないだろう。私たちの普段の生活が、どれだけ便利で、充実したものを身をもって実感した。

**13リットルの水** ところで、13リットルの水は実際どのくらいの量なのか、ペットボトルを並べておいてみた。(写真) この量の水を、何人の家族で分け合い、何に使うのだろう。ちなみに一分間シャワーを出しっぱなしにした時に放出される水の量がおよそ12リットル。私たちはそれを惜しげもなく流している。それが当たり前と思っている。いろいろなことを感じた体験だった。こういう現実を知り、それを実感できてよかったと思った。

### (3) 壁新聞を作成し、文化祭で発表

以上の取材や体験に自分たちの意見を加え、まず壁新聞を作成し、9月の文化祭で発表しました。そこには水がめも展示し、多くの人たちに実際に持ち上げてもらいました。



文化祭で展示した水がめ



作成した壁新聞と部員たち

### (4) 学校新聞の特集の一つとして記事をまとめ、発行

文化祭での周りの人たちの反響も記事に加えて、10月に学校新聞に特集「水を通して考える 世界に目を向けよう」として発行。全校生徒2000人に配布しました。

## 3. 活動を通しての感想

### <ユニセフへのお礼の手紙より>

先日は、本校の校内新聞「星高新聞」の特集にご協力いただき、本当にありがとうございました。

私たちは、ユニセフさんから頂いたユニセフニュースを読み、水を中心に「私たちにできること」というテーマで特集を組み取材をしました。その中で、今の世界の現状を伝えるために、記事に頂いたユニセフニュースなどを参考にさせていただきました。

世界の現状を調べていくにつれて、現状は私たちが想像していたよりも厳しく、なにも知らなかったことに、大きなショックを受けました。まだまだ知らないことが多く、それらを知り、何が私たちにできるのか、まだまだ考えていかなければならないものが多いと感じました。

また、水がめの貸し借り、写真提供でもお世話になりました。実際に、水を入れて水がめを運ぶということは、見た目よりはるかに大変なことだと実感しました。水がめで水を運ぶ作業をしているのが、女性や子どもたちだと聞いたとき、私たちは何の苦労も知らず、大量の水を消費してきていたことに対してショックを受けました。水は生活に欠かせないものであり、命と深くつながっていることを改めて感じました。

貴重な体験をすることができました。ありがとうございました。(2年生)



星高新聞151号2面特集「世界に目を向けよう」